

保育所での乳幼児の生活体験と自立：日常生活体験 のプログラム化に向けて

石坂, 孝喜
大塚保育園

<https://doi.org/10.15017/19976>

出版情報：生活体験学習研究. 9, pp.23-30, 2009-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

保育所での乳幼児の生活体験と自立

—日常生活体験の保育プログラム化にむけて—

石坂 孝喜

A Study on Life Needs Experience and Independence of the Babies and Infants in the Nursery school

Ishizaka Takayoshi

要旨 保育所に預けられる子どもは、親が就労している時間帯は保育施設等で過ごし、その時間が長くなるとその分家庭での生活時間は短くなり、育ちの場が外部化され、家庭での子育ては親に代わって保育所での保育が広がり社会化される。これらの外部化傾向は家庭や親への支援が求められ、その対応策が保育所をはじめ各機関で少子化対策と共に進められている。また外部化は従来、家庭で行われてきたしつけ、生活様式、マナーなど補完的機能にとどまらず、親の教育力、育児力をはじめ、子どもの育ち、生きて行くのに必要な生活力、生きる力の育成にまで及ぶようになってきている。このことは新教育基本法にも家庭教育の項目が新たに盛り込まれ、また幼稚園教育要領・保育所保育指針なども符号する。

家庭教育、乳幼児の教育課題として子どもの育ちに対して幼少時代の自然・生活体験的学習の推進が家庭教育の外部化、発達環境の悪化で保育所の保育過程が重要視されている。本研究は、現在の保育所の実践事例を踏まえて、特に幼児教育の場でもある保育所保育を家庭教育の観点からも子どもの生活の場として捉えたい。その上でしつけ、子どもの自立、発達課題解決に向けての体験的学習の内容、過程、保育課程として自己形成につながる基本的な生活体験学習の事例を提示し、現在の子どもの育ちの課題を一般的な生活様式、生活習慣の形成を保育所保育の視点から明らかにする。

現在、子どもの生活に基づいた幼児教育は公的教育の外にあるが、子どもの育ちを見据えた生活教育（保育実践）が求められる。それには家庭と保育所の連携、親と保育者の相互の協働、合意など親の教育権の守護、子どもの発達保障、社会化に向けての視点などから、現在において家族構造、社会環境など視座においての新たな保育環境の整備、保育内容など子どもの生活を主体にした保育環境と、体験的な保育・学習が求められる。また家庭支援・子育て支援と保育所の役割は親や家庭の支援に重点がおかれ、日々の子どもの育ちへの発達支援・援助の対策は弱点のように思える。子どもの育ちを生活と教育を一体化した保育所保育と家庭教育との共同の視点からも子どもの日々の生活を保育・子育て環境、また保育者（指導者）の援助も包括して全体的に発達環境として検討する。

はじめに

子どもの生活体験と発達環境

子どもの生活体験としての文脈は保育所に生活する

乳幼児に置いて進めていくが、現在、特に保育園児は家庭において親と子、兄弟が共に過ごす時間、会話など少なくなり親子関係の希薄化と家族の個人化も進ん

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

大塚保育園 (〒192-0353 東京都八王子市鹿島15番地)

Otuka Day Care Center, (15 Kashima, Hachioji City, 192-0353 Tokyo japan)

TEL 042-676-2526 (代) FAX 042-675-7925

でいる。また女性の社会進出は家事、育児の外部化が進行し、また少子化は核家族化など、社会は高度な科学技術・情報化など著しく変容し、進歩発展した時代に生きている子ども達の生活はどうあるべきなのか課題は多い。大きく文化的影響を受けている側面、そのなかでもテレビ、携帯電話などによるマスメディア、情報の伝達手段の広がりや地球規模、隅々までにおよび、外的な自然・社会環境の変容に伴う生活の変化と、一方子どもの成長・発達過程において変わらない内的な環境生活もあり、これらの内外の環境の調和・平衡が生命の持続的発展、存続に繋がる。

幼少の子どもにとって日常的な生命維持、エネルギー源としての衣食住に関する行為の学習・獲得は生得的な行動から、親などの援助と自主的意志による筋肉運動の繰り返し、練習することで可能になり、それは生きるための自己保存の常識的・日常的な基本的行為として乳幼児期に体験することである。

現在、保育所に通う多くの子ども達の生活の場は、家庭と違いのある生活環境が日々入れ替わり、生活は環境の選択と相互作用において変化し、変容する過程である。子どもの日常の生活が家庭から保育所に移されると、その施設・設備など住環境、地域、社会環境や、保育内容、養育者の意向など、また親の施設の選択によって子どもの生活は規定されることになる。既存の保育施設は幼児教育としての幼稚園（3歳から5歳）、託児施設（0歳から5歳児）として保育所、そして子ども認定園等の選択肢があるが、親の教育方針、母親などの就労等の家庭条件に大きく左右される。親が家事労働として育児に専念できなければ、外部による支援と子どもの援助が必要になり、親のライフ・ワーク時間によって子どもの生活時間は大きく左右される。現在、子どもが保育園で過ごし生活する時間は8時間を超え長時間化し、昼間の生活は保育園での生活になりつつあり、諸々の日常生活的な行為、習慣、生活様式など、従来、家庭で行われていた日常生活にかかわる体験的学習は保育所において行われている。イタリアの例を東内がモンテッソーリメソッドの今日的役割～集団の中での「しつけ」として基本的な生活習慣の習得の問題として報告している。またモンテッソーリメソッドの日常生活の内容は、保育所で保育計画として乳幼児の成長過程、生活過程、日常の生活習慣

の確立、自立に向けてその目的が、生活に根ざし、幼児の発達課題解決の生活体験学習として検証する。

第1節 乳幼児の生活体験の特色とその事例

1. 乳幼児の生活体験の特色

子どもの生活体験的学習の構造は、「指導者と学習者」、「子どもへの援助として保育者と子ども、教師と生徒」の関係性が強く、学習者である乳幼児が環境への主体的学習行動として展開がどこまで及んでいるのか問題になる。また「新しい環境教育の実践」^{注2}第6章生活体験学習論で記述されているように「人—自然」、「人—人」の関係性として自然体験、また生活体験の構造、また社会体験としての学習者の環境に対する学びの構造とは異なる。「人・自然・社会」全体を発達環境、手段として捉えて志向する方向が、自己形成・自己実現としての自立のための生活体験として生活過程・発達過程を経ての体験的な学習過程として学習内容・方法の実践である。

また同じく、生活体験をヒトによる自然のつくりかえ、「労働」の観点から記述している。生活体験が経済活動につながる生産と消費の両者につながる活動として捉えているが、子どもの生活は自立、社会化していく過程にあり、将来への可能性としての体験であり、直接労働・生産に結びつくとは限らない、しかし衣食住につながる基本的な生活技術・様式は日常的に生涯を通じて行われるが、またつながるものは別として何処まで子どもの将来、社会生活に対して体験として何処まで学習する必要があるのか、文化の継承として生活体験の重要性はあっても、その文化の領域、内容、方法には限界があり、その地の日常的、それとも非日常的な文化体験なのかが問題になる。

2. 0 保育園での日常生活体験の事例

現在、幼児教育としては幼稚園の他、0歳から就学前までの乳幼児は保育所等で養育・教育されている。事例①は、0 保育園でのごく一般的な保育内容として子どもの環境への適応・配慮としての日常的な衣服・身辺の自立としてトイレ・トレーニング、^{補注第2グループ2} 歯磨き^{補注第2グループ5}、^{補注第2グループ4} 手を洗う^{補注第1グループ16} など健康・衛生面など、次の事例②は食生活につながる野菜の栽培と調理、ジャガイモ掘り、キュウリを切るなどである。0 保育園の事例は親の

おりである。保育所の1歳児から2歳児のトイレ・トレーニングパンツからより薄いエコニコパンツ、最後は生活上の自己パンツとなり、オムツを着けた生活から自立し自らトイレで排泄可能となる。そのおむつの取れる年齢は表1でも読み取れるが2歳と3ヶ月過ぎると殆んど幼児が外れる。おむつも布と紙とに大きく分かれるが、〇保育園では環境の観点からもリサイクルのできる布おむつを使用している。さらに子どもにとって排泄する意識が確立するまで、トイレ・トレーニングの練習期間が必要であり、またトレーニングパンツ着用による練習は衣服の着脱、その後、着用する自己のズボン、パンツなどの着脱が早期に仕上がる利点があることから取り入れている。

トレーニングパンツの使用により、子ども自身で着脱・処理できるよう子どものサイズに合った小さな椅子を用意し、そこに子どもが座り、パンツの着脱の練習をする。(写真1)

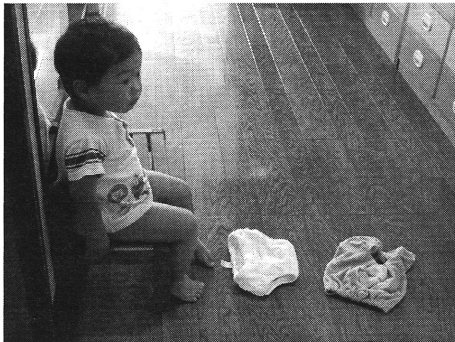


写真1 パンツをはく前

子どもがパンツの着脱を練習する過程にはいろいろな後前、左右反対、表裏、同じ穴に両足を入れるなどの誤りが生じる。誤りに自ら気がつくこともあるが、保育士の援助を何処で手を出すべきか、その必要性は、パンツ着脱の獲得に向けて子どもが練習を繰り返し、一定期間の練習(トレーニング)を積めば必要なくなる。(写真2、3)を参照

乳幼児は親や保育士などの介助によって徐々に離れ自立していき、生きるのに必要な生活様式を習得し、習慣として身につける。こうして幼児が歩行可能になり、生きる最も基本的な生活習慣としての、衣服の着脱、排泄物の処理(トイレの使用)ができるようになる。

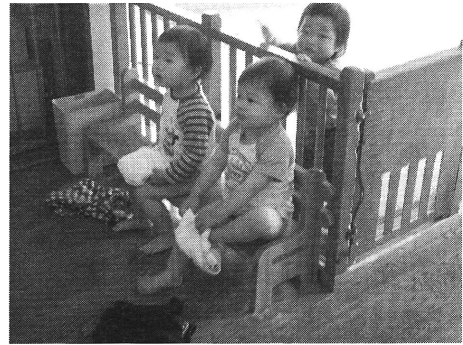


写真2 パンツ着脱の練習をしているところ



写真3 立ち上がってはいているところ

食事の準備、片付け、布団を敷く、掃除など、また身辺を清潔にする手を洗う(写真4)、歯を磨く(写真5)、靴を履くなどの活動は保育所の日課として行われている。

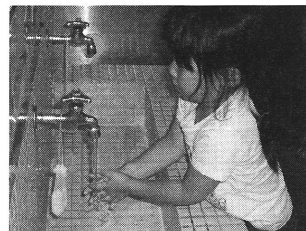


写真4 手を洗う

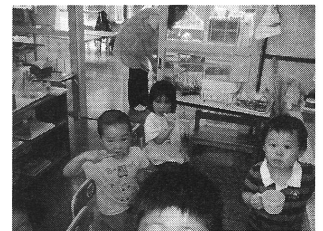


写真5 歯を磨く

モンテッソーリ女史(1870~1952)は、家庭・社会生活において日常的な家事労働・作業を幼児向けに教育内容として日常生活の活動をモンテッソーリメソッドとして提唱し、日本においても一部の幼稚園・保育所でも取り入れられ実践されている。〇保育園は、保育計画を立て日々の保育にモンテッソーリメソッドを日常的な活動として用意し、個別活動の時間として導入している。取り入れた理由は、特に子どもたちは保育

者に指示命令されないと動けない、また騒がしく、落ち着きがない、自主的、集中活動が見られない、環境への適応、秩序ある行動が見られないなど、少しでも落ち着いて活動できるような保育、またその環境を模索しているうちに子どもの自由に活動できる時間、空間と教材・教具を準備し、その環境・活動の中に日常的な生活に必要な作業、仕事などして手足の運動能力を身につけるような活動を用意し実施している。

事例② 環境への適応としての生活体験の事例

「食につながる体験活動」

食につながる活動として、子どもたちが個別活動として日常的に自由に「きゅうりを切る」などの活動、また〇保育園では園が作る給食が日々子ども達に提供され、食事の時間がある。普段は日常的に調理師が調理したメニューの料理を食べているが、子どもたちの食につながる生産にはジャガイモ栽培、消費にはその収穫物を調理、食する過程として「食農教育」の実践として、ジャガイモの栽培、そしてカレーづくりを子ども達の手でおこなっている。日常生活の活動は活動の性格上「お仕事」と呼び、園庭、屋外での子どもの自由な遊びとは異なり生活体験的な活動として実施、また保育において食につながる体験的な活動は、菜園での野菜栽培、収穫、また^{補注第1グループ16}野菜の皮むき、ゴマをする、リンゴをおろす、など野菜、果物など食するための作業などをする。



写真6 ジャガイモ掘り

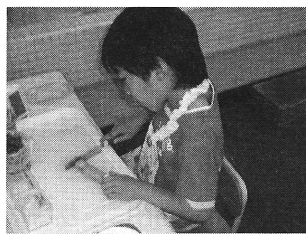


写真7 きゅうりを切る

「環境整備としての体験活動」

保育園児は1日の生活時間が幼稚園児より長時間ゆえ、他に衣食住にかかわる日常活動として洗濯・掃除、花への水やり、花を飾るなど遊びとは異なった活動を園生活の中に取り入れている。

集団生活として園で過ごすためには、子ども達もお互いに規範、マナー、生活様式を身につけ守るようす

ることが生活体験学習の大きな目標であり、乳幼児においても援助の手は徐々に成長するに従って離れるが、衣食住に関わり生きることは、繰り返し体験することにより鍛錬、練習し習慣化し、身につける。また子どもにとっての環境への適応は大人の援助により、自らの経験によって習得し、発達してゆくため、目標に向っての課題解決、それは人間形成の過程における最も基本的な生活術と言えよう。

幼児向けのモンテッソーリメソッドの教育は2歳半位のクラスから始める。ある程度身辺処理、環境への適応など衣食住にかかわる日常の生活について自力でできるよう自己確立を目的に、子ども達の成長に合わせて感覚、数、言語、文化などの具象教具を置き系統的な学習を進める。また日々自由に子ども達が活動できるよう生活に用いられている道具、教材・教具を準備する。

第2節 保育環境と子どもの生活体験と遊び

幼稚園・保育所など幼児の教育施設における子どもの生活は、日常的な衣食住にかかわる内容と子どもの成長発達・学習に関わる教育内容、遊びなども生活体験として包括化することができるが、〇保育園の日常生活体験の事例は遊び的な要素はなく、食事、睡眠、衣服の着脱などは自己の環境への適応、生命・健康の維持、継続活動であり、成長・自己実現など可能性を求める探究的な活動とは異なる。遊びも保育園生活には当然あり、お仕事として捉えた〇保育園の事例は日常生活体験で、遊び的な要素のある活動は除いている。3歳以上児の野外、自然の中での自発的欲求にもとづいた自由な遊びは危険を含みつつ、冒険的な探求心など深化され展開される^{注3)}。室内における生活に起因するごっこ遊び、体をつかった運動遊び、集団遊びなどは、また造形、劇遊びなど表現的な活動は、子どもの情緒的緊張の解放感、創造性、楽しさをもたらし、それゆえに子どもは想像・イメージの世界を描き、また活動の中に仲間との言葉のやり取り、それぞれが役割を持ち協働的な活動は責任が生まれ遊びの中に社会性が養われると考えられる。

〇保育園の事例は、子どもの自由活動により自立に導く生活様式の習得に置き、環境と社会生活への適応と、また個別的な活動により自己形成を図るところに

おいている。

一般に保育所を利用する親は自宅外労働により子どもとの接触時間が短縮され、その分保育所が育児を支援していることとなり、生活にかかわる体験的な行為は保育所が代行することとなる。親の保育施設への期待は何であろうか、子どもが喜んで登園し、楽しく、遊び、たくさんの友達・仲間を作って仲良くできることなど、社会性においていることは共通の願いであろう。しかし育児の依存度と弱体化は相反する関係にあり、それにつれて人間関係の希薄化が進み、保育所の役割は親に対しての就労支援と子どもの発達保障とを両立責務を負わねばならないこと、それには最初に子どもの生命を保護し、その上に成長・発達に必要な保育内容、それに達成可能な環境を用意することであろう。その事例として生活体験的な保育プログラムとしてモンテッソーリメソッドが利用できると考えられる。

補注全体参照

現在、特に子どもの育児は家庭での援助が主体ではあるが、「しつけ」、「生活習慣」などの自立につながる生活様式の形成は家庭から保所にその役割が時間的にも、補完的な機能から転化ししつ々あるように思える。つまり、親と保育者との連携、共同による子育ては大きな今日的課題であり、より保育所が子どもと親をつなぐような活動、場、できれば時間を持ち親子の絆、関係性の回復、また生活体験的な活動を多く取り入れることは子どもの正常な育ちを保障するためにも必要である。今後、保育所に限らず幼児教育施設において積極的な生活体験的な活動を取り入れる必要がある。

本事例は〇保育園における一部の事例に過ぎないが、乳幼児にとって衣服の着脱、食べること、睡眠など日常生活体験は一般の保育所で行われており、保育所は家庭に代わって乳幼児の生活の場として過ごす所、その生活としてトイレ・トレーニングの過程を写真1から3のように生活環境への適応のため、生きるに必要な技、生活様式、マナーを年齢に応じた到達目標として練習、訓練の繰り返しによって学び、生活の確立、生きる力、自己自身への配慮のための自立学習を行なうところとなっている。

こうした体験は達成すれば喜びであるが、その学習過程は親や保育者などの援助の手が必要で、過度になると依頼心を増し自主的な行動につながらないなど、介助の程度が問題になる。〇保育園の1歳から2歳児

のトレーニングパンツの使用は子どもの排便の自立をより早く、また自主的に処理できる方法としての練習であり、またそれは次の、衣服の着脱などの練習につながることとして実践している事例であり、習得すれば必要はなくなる。

また身体的発達、自立にむけての日常的な生活習慣の体験学習的なプログラムは、保育計画でどの領域に入り、またデイリープログラムでは何時の時点、場で体験するのか、それは学習計画として編成するような内容ではなく、日常的に習慣化される生活様式、形式、マナーとして練習を繰り返し、日々の日課とすることで保育所の生活の場として生活習慣化されて身につける内容である。

おわりに

乳幼児の生活、環境にかかわる今日的課題

子育ては主婦による性的役割分業から、現在でも家庭において夫婦共同による子育てが基本原則であるが、保育士等の専門職による保育施設等での社会的育児が進行しつつ、家庭の教育力、育児力の回復のため家庭・子育て支援が行政主導で制度化し普及している。乳幼児の養育は生涯教育の一貫として誕生から始められ、家庭での育児、施設での養護・教育を超えて「生活、生きる」ことへの援助である。生活を教育とするなら、教育の概念は一変し、乳幼児の教育は教育・保育計画、時間割に頼ることなく、こどもの生活の事実に応応しなくてはならない。この確信に従えば、新生児の教育が、最も重要なものとなる。(注4)

現在における乳幼児の教育も環境と人とのつながりに由来するが、家庭はもとより乳幼児施設においても子ども達の生活が快適で楽しく過ごせ、遊び・活動においても主体的に取り組める教育環境(教材・教具などの教育内容、組織、方法論)全体を整備し、再度子どもの内面に裏づけられた保育者の子どもの観察と環境への探求の深まりが求められる。就学前の乳幼児は即時、効率、結果の詰め込みがたの知識偏重ではなく生活中心の体験型の学習が望ましい。

乳幼児は「やりたい、どうして、自分で」といって何にでも意欲、探究心などの積極的な態度、また興味・関心、自主的・挑戦的心情・意欲が見られ時期でもある。

日常生活の体験型学習法としてモンテッソーリメソッドを日常包括的保育活動として保育所に取り入れることは、トイレ・トレーニング、お仕事（個別・集団活動）を始めとして子どもの個の身辺自立、発達を深めることを本稿で明らかにした。今後、保育施設における子どもの集団生活から、その内容と学習方法を実践的に検証する必要がある。

【注】

- 1) 東内瑠璃子 生活体験学習研究 Vol. 5 2005 (平成17年1月) 15-20
- 2) 朝岡幸彦編 新しい環境教育の実践 高文堂出版 2005年 131
- 3) 児童心理 特集 遊びの心理 第145号 金子書房 1959年 1-2
- 4) 松浦鶴造著 モンテッソーリ教育の研究 五月書房 1989年 95

【参考文献】

- 1) 環境史研究 2006年8月 第5号 49-56
- 2) 南里悦史研究代表「幼児・学童期の家庭・地域における生活過程分析と大人の教育的役割についての研究 2007年
- 3) 田中喜美子 働く女性の子育て論 新潮選書 1988年
- 4) 相良敦子著 モンテッソーリ教育 1 理論と実践 モンテッソーリ教育の理論概説 学習研究社 2005年
- 5) 岩田陽子・南昌子・石井昭子著 モンテッソーリ教育 2 理論と実践 日常生活の練習 学習研究社 2007年
- 6) 福岡モンテッソーリ教育研究会・未満児部会 江口裕子／代表著 モンテッソーリ教育理論と実践 0歳～3歳までの育ちと手助け 学習研究社 2001年
- 7) 大田堯著 子育て・社会・文化 岩波書店 1993年

【補注】

日常生活学習プログラムの内容

—MONTESSORI—METHOD

第1グループ 環境への配慮

1. 歩く
音を立てず、物を踏まず、物にぶつからず歩く、立つ、腰をかける
2. 運ぶ
椅子、机、じゅうたん、食器、物
3. 置く、掛ける
箒、はたき、ちりとり、ブラシ
4. 巻きのばし
じゅうたん、ビニールマット
5. 埃をはらう
椅子、机、額縁
6. 掃く
クラス、玄関、庭（石、木、たたみ、土、素材の違うところ）
7. 開け移し
米つぎ、豆つぎ、水つぎ、色水つぎ、砂つぎ
8. 折る
布、テーブルクロス、アイロンかけ用小布、紙
9. アイロンをかける
小布、リボン
10. 拭く
スポンジを絞る、スポンジを使う、テーブルを洗う
11. 洗濯
タオルを絞る、小布を洗う
12. 磨く テーブル、鏡、金属
13. よせ集める パンくず
14. お茶のサービス
15. 花の水替え
16. 野菜の皮むき
17. 点滅
18. 通園カバンをつめる、弁当
19. 食卓の用意、洋式、和式
20. 食後の片付け
21. 庭園の仕事
22. 洗練された指先にいたる練習

第2グループ 自己自身への配慮

- 1、鏡を見る
- 2、着る、脱ぐ
- 3、着衣枠（ボタン、スナップ、ファスナー、尾錠、
編み上げ、かぎホック、靴の紐、靴のボタン、蝶
結び
- 4、手を洗う
- 5、歯を磨く
- 6、漬をかむ
- 7、靴を磨く
- 8、上靴をはく

第3グループ 社会への適応

- 1、戸を開ける、閉める

- 2、刃物の受け渡し
- 3、どうぞとありがとうを使う
- 4、ごめんなさいと失礼します
- 5、他人の仕事を見る態度
- 6、園庭の散歩

第4グループ 運動の分析と調整

- 1、線上歩行
- 2、静粛の練習A
静粛の練習B

AMI モンテッソーリ教育《日常生活の練習》の
アルバムより引用 1983年